奉使日本紀行

從第拾編
至第拾壹編

ル2
3052
3

早稲田大學圖書館
寄託者 内田文庫
寄託書第五一號
5
第13號
第3冊

門 ル 呂3
號 2864
巻 3

門 ル 2
號 3052
巻 3

奉使日本紀行

第十篇　ワシンクトン諸嶋を去てカムサツカに着を

第五月十八日我船タヨホアの湾を出帆せし時天気あ
しくなりて暴風来り湾口の両側に在る岩に船を吹付
僅に一段の長さを相離れたる危きに及しなる故
に小艇一つと艇綱二つを失いたり九時に至り漸く風
は稍東北に至りて烈し此時又子ツ船の索切れしかるを
見たり我船は小舟を引揚艇を船に拵付て船を北
に向て嶋に近き今朝空晴て風悪しきに由て之遺

昌平黌図書
大正十一年九月寄贈 内田糸子氏
京都帝国大学図書之印
高橋蔵

しろき島の隅角を再測量せんとして正午に太陽を
八度八十九分四十六秒に見るニユカイツ島の西隅を
我船の北に当る此隅は西経百三十九度四十九分
○○として我等此隅を以て離るゝの標的に利用
予船を流き東風に乗し庚申間に遣りマルカンドゥ此島
に来る時に見し北の方に在島を験せんと欲してフレ
ウリートウハ謂くコーツク初次の航海に伴ふチユバヤの所
謂ヲタヘイテルのヲイワボツタなるへしと余程は嘘多き
云も 其島を見るには船中共に朦朧なるへしと
思ひ予船を九時に よきてニユカイワ西隅岬の西に太

一夜に在て翌朝六時半盡く帆を張て庚の方に遣り
晝半に至て西に向て遣りぬ予思ふに久しく庚申間
に向て行くは要なきて何者マルカンドハ西に向て其地を見
ありしなれは我等も疑ひなく日の西に傾く比迄
にそこれを見出さるへしと 夕六時にして船を西に遣
るに猶土地を見出さて支ゆへし此邊にしてもまや其
地を見出しえたるもかれを又予たるく西に去ると欲
まるて此大洋の西に航しワツシンクトン諸島より サンド
イク諸島に向かて直路にてを常に危き暴風ありて
彼リユイラナレト、ヘルゲストのダータリユス船の危難のゆき

あることをあり千七百九十一年〔寛政三年〕甲比丹
ハンコウヘルもヨクヘイテルよりヨワイヒに航して暴風に
逢て遂に止ことを得ず東して其嶋に至りしことあり
其時夕六時に予針路を壬亥間に転ず此時我
舶南緯九度二十三分西経百四十二度二十七分に
てニュカイワ島より西にあること二度四十八分あり此夜
予此針路を取りて後檣帆数を減して舶を静かにし
此辺の洋中に地方を見ることを疑ひしに不幸
にして此西二日は劇しき東或は甲寅間の風に逆
ひて我舶の古き帆を吹破る又潮は常に西に

流れゆりハンコウヘル験しを彼を此に向ふとあれど
予今月の廿一廿二日の間南緯に変より六度の間
少し坤の方に向ひ四十九里を過る而已予是に於
て此の方と壬の方に舶を遣るに潮の南に流れ而
後サンドイク諸嶋に至るとも常に此西に向ひゆきし
翌月廿二日我舶南緯三度二十七分西経百四十
九度〇〇[illegible]今日羅針南に傾〔イキリナチイ〕十三度其振は小東又
度十八分なり
今夕灰白色の鳩の大なる鳥あり舶の縄具に集
まる人手を以て之を捕へ[illegible]

廿四日風静なれハ「ドクトル、ホルネル」「シキス」のテルモメーテル
を取て海中に沈安し百尋の深さまてに十二度半
と成る是を兩手に収てハ二十二度四分一ニして氣候
も手の尋に同しハレセの器ハ氷中ニ在て二十分時に
してこれを揚ケて十九度なりき是ハ之を揚るに就
て分の着しく温に移りたりけり共識となりし時
我船ハ赤道の五十六分經ハ百四十六度十六分也
又甚て羅針ハ少東の振四度三十四分南に傾を
八度三十分斗り廿五日も風を微かにして暑り易く
時として八全く凪を結し總元氣候ハ暑さ中和して

数七値に収蔵あらし暑に比すれハ頗分ハ殊に清
涼なりし但テルモメートルハニユカイワと出帆せし時に
至只一度半降りたる而已
第五月廿五日金曜日三時赤道下を定め我時計
に従ハ經百四十六度三十一分總元海中舟路に従
ハ百四十四度五十六分とそ此日ハ七日の間に我
經度実に一度三十五分と差へり赤道を越え栄の
正午に測るに南緯只ハ四分半を羅針ハ南に傾六度
十五分なりし總元我此測ハ真正なし難かりし 次日
北緯一度十二分經百四十六度四十六分の處ニして

ハ西度三十分なりし。數時後に羅針西度十八分の
小東振なりき
此より後支那より欧羅巴に向ふまでハ緯度
ハ皆北緯と知るべし
此にあるまで我等島影を見ざりしが第五月廿七日
緯二度十分経百四十六度西十分の處にて「ヘケールキ
リングホトケル」鴿及小鳥を多く見たり其中に大なる
黒き鳥あり我船の桅即索人に此鳥ハニユカイワの近
方又ハワシングトン諸島に多く見るものなり遠く地
方を離れてハ飛ありかず又樹の青き枝の船の近

くに流れ来るを見る故に其地方に遠からざる事を
知りぬ今度中未審の土地を見出さんと望しに
月も明らかならざりし土地と見えるものなし
第五月三十日我船の庖人ヨハン子ウランド死したり
此人ハ兼て重病なるハ人皆知れるを「カムツカトカ」
まてハ送りゆくべしと思ひしがニユカイワ島の逗留に
暑気の爲に其死を速にせしこと云ふべくもあらず彼ハ「コール
ランド」の産にて行年三十五にて甚善性の人なりき
緯八度に至るまでハ數々風止或ハ風あるも弱り
やうやく一日西風ありて十六時の間續き吹きたるに

空曇り大雨やまさる我等常に空なる桶に雨水を満し
めたり緯八度の處まて風良けれハ甲寅間に向ふ是
所謂バッサート風にして此より我等サンドイク諸島に
至るまて不断に吹きたるなり爰にてハ我等の經
度の測ハ月離の測に依て時計の測と相符合せり
然とも第六月三日に我実験に従ふ時十分の差あ
りし次日にハ二十八分の差となる時計ハ遥に東に
在しとてホルネル甲比丹リシヤンスコイ及ひ予ら実験ハ我
能相合ふといへとも然るなれハ時計に関して我
等の距離の急に変せし所以を思ひしりヲワイヒに

着して一二八号ハ三十三分三十秒一八五六号八
十一分〇〇の東にあたると見えたり
風ハ荒く浪も艮寅より吹て北東よりの高濤来り
船を劇しく蕩揺せしめて船に漏出来て毎日に二
三回も之を射(ハヂキ)去られハかならす然とも其漏ハ唯
船の荷の軽きに由て遥に水上に高くなりたる
生起りたる漏なれハ危とせす是を申まてもなき
折々ある者ハ物ありくなり従日の腐て分の之
ハ透るなり然とも カムツカトカに着てハ之
を修理をへすしく其に由て予ハ只毎日かく水流

田村ありて 此暑中は多く舶夫と労らしむると云
ふなり
第六月七日木曜日 朝六時三分測るに ヲワイヒの東側
にもちや来て 其処ぬと去りて 針路を北登するに
其成の方に転し八时半に 地方を見出し而後東に
ヲワイヒの東隅と我小西三十六里の距に見る 彼見
モウナロア山と見て 午西に 船は偉十九度十分に在て
ヲワイヒの東隅は 偉十九度三十四分にして 我より正北
に在此隅の経度は甲比丹コークの測ると密合しハンシ
コウヘルの測も同しく 正当を其に出て 我船の时斗の

差と要して検點せ
ヲワイヒ東隅の径度

一二八号	百六十四度二十二分三十秒
一八五六号	百五十四度四十五分〇〇
ペレニングトン	百五十四度二十九分三十秒
甲比丹コーク	百五十四度五十六分〇〇

甲比丹コーク及ハンシュウヘルの測其に精密なるに疑なし
我から月離の測第六月四日と十一日（ヲワイヒと出帆せし一日後）
に於て為せしは一二八号は初めに四日 三十九分後
小十日 三十五分の東差ありて 此に出て我时斗の径

に此差を改正せバ此後の測量を為すに足るべし此故に
意を用ゆべき我六箇の時計の内にアルノルトの器
四具あって此僅かの途に於て甚だ差ありしは
何の故ぞ寒冷の地方に往く時計に如此変を起さ
そニユカイワと為して已後二箇半の違ある而已海中舟
道の算にて此を百五十度五十四分とす海潮は二
十一日の内に四度二分西に流るれバ是を之に算ふ
是ハ日に十一里とす
ニユカイワ島にて畜類なく我等買ふことを得ずして我
両頭に只豚七疋 一疋七八十ポンデンの重 ある而已なれバサント

イク諸島に着せバ食料を多く買取らんと欲せり
我船等皆壮健なりと雖も伯西児(ブラシリ)を出て後多くを
塩肉のみ用ひあれバ敗血病の患あらんも思ふべし
我等此後カムサツカに着しても少なくも一ケ月ハ逗留
すべし夫より第九月の末まで此に長滞にあらんと
欲せり若其時節を過しては日本海にてモウソン風
の替りもあるなれバ務て此舟路を急ぐ筈なれども
ワシングトン諸島より直にカムサツカに向ふ時ハ
船夫等の食物の為に病を引出さんも計るべくなれ
それ故しばしば時日を費し此より先サントイク諸島に向ひ

ヲワイヒ島の海濱に至く舶を遣り彼島人の我等を
見て欧羅巴貨物を交易せん為に十六里若十八里の
彼より舟を出し来りて交易せんと我求る食料もなく
入る適しと計りてヲワイヒの南東濱に寄て彼島
とをく乗廻らしう我望を遂得ざりし事下に記す
左の如し
前に言ごとく我船を濱より六里許を隔てマルスセイル船名
ありみて濱に沿ふて舶を遣りしに濱より小
舟を出し我方に来るあり然るに是も小食
料を載るのみにて我等六艘より出て僅に二三の

脱
六の椰子二の小豚を得たるのみ是等も甚
高價にて賣人此を咬囉吧に換んと欲し我船中に
右の品ハ交易になるべきなく多く物を與へ辛して之
を求めたるなり嶋人の作りたる品ハ多く持来り
て我ものに買べしと勧むれども食料の外ハ買ふべく
もあらずと制しぬれハ其内に幼き女子を携へたる
男其子の父なるべくみゆるが彼の賣らんと欲したる品
を不用とし返しけるにて甚き愠りたる色見へけし
かくして内に空しく雨を催し暴風起りて濱よりも小舟
の来るなくされハ我舶も島より離れ強き東風にて

丙

船と両巳間に遣りたり扨もヲワイー島浜辺ハ椰樹の林と園圃並に人家満々て甚き人煙繁庶なる景色に見へワレングトン諸嶋の比を絶きに行しもと思へるに食料の乏しき実に驚くへし扨此島の東隅より平地見へ夫より漸々と地高くなりて彼モウナロア山の麓に至る此山最も高くドリテル、ホル子ルの測りて二千二百五十四対斯トイス 一対斯六尺一寸二分に当る 是を即ちテ子リツハ峯より高きこと三百五十対斯なく是ハ全地球上に於て最高とせし此山とナーヘルベルグと名くハ此山の頂全く平かにして卓に似たる故なりと云

我等此山の麓に来る時ハ此山雲に掩られ只一瞬間之を見たりしか次の両日も毎々其全形を見たるに其頂の平なる凡一萬三尺許の廣ありと見ゆ此山常に雲霧に掩られ全く山頂を見ることは稀なりと唯気の清浄なる朝に其好景色を見るへし

ヲワイヒ人の我舶に来りたるを見るに此とニユカイワ人に比ぶれハ好しきも其形体も小にして筋骨逞しからず面色黯淡然れとも体に彫文せず又我舶に来りし人とハ盡く体に汚班のなき者なし是ハ黴毒に因て然或ハカワを多く飲に因るなりと然れとも或ハ

土民もカワを飲といへども汚班を發さゞるを
恠しミ故ニユカイワ人は其形体に於てはヲワイヒ人
より大に勝ると雖も意思の働き彼南方の諸隣に
至てはヲワイヒの方はまされりと思はるされバ欧邏巴
人に交ることも多く殊に諳厄利亜人は此に居る者
数多ありて此島人は才智も發し事業も出来る支
我から眼を注ぐるともあり且稲の製作もニユカイワ
人などは遥に勝れて見へたり甲比丹コークの記せる
此二島人の詞を集めたるを見るに二島の詞相同
しき事多く見へたり然るを我舶に居る払郎察人はニユカ

イワ詞と知りたれども此島の詞とハさるを能く
此島人の諳厄利亜の詞を知るは我より能く聞知る
ことを得たり但ヲワイヒの詞なりとて彼ニユカイワの詞より外
なく辞法になりて払郎察人の之を知るともなへ
たり故払郎察人は此嶋に落着べしと思ひ来り
しかれども此島人の彼に遇ふるは善からず虚しくも
見へされば今は後悔して更に猶我船に留り
居て未だ願きたる故彼が人々なるの匠し叶はざる
は知れどもヲワイヒなりとはニユカイワにても彼が国難
に逢りんと恨ミ彼が請に任せたり

翌暁船をヲワイヒの南隅に向て遣る此處をコークの
記に食糧を得し大なる村ありといふ事なれハ我等
も共ニ食糧を買ハんと欲して其南西濱のところに
土時に其隅を発足しけるに午前に鈍頓の礁あり
夫より百尋許を離て一列の岩礁ありて圍ミ此に
浪打懸て在しコークの測に此隅ハ緯十八度五十四分
経百五十五度四十五分とせ正午に此隅ハ我船の
南東七十八度にして其距三里に過る時ホルテル及ひ
ワーウエンステルレの測にハ緯十八度五十四分四十五秒
とせコークの測に符合せり経度ハ我時計の定昨日

より一秒ばかり遠きを叙前にいふ所の村を見付たれと
直に我船を風下に寄せけれハ風烈しく吹て岸
寄をきさて一里に過るを此まて二时許見合セ居た
るに濱より三艘の小舟を出し来る其第一の船に
大豚百ポンドもあるへきを載たり我等悦ばかりそ
之を買て月曜日の船夫等の饗食とせしに彼小
船共の載せ来たる他のものハ我等に賣さりし
も亦彼等に對し気の毒に思ひし布并斧小刀木綿
等を出し又彼豚の主たる者に大なる哆囉呢の外
套を撫(換)ミ物とし與へたり且他船より小豚一頭を買

人總て此三艘の船より食料を備へ得て我等大に
悦ひなり此にても女子を載せ来りたるか昨日の
類と見へなり扨其て哆囉呢と換物にせしハ
食料を得ることも亦かゝる事し此地方にヲワイヒ島主
の居處をカラカキュアと名つく此村よりも大なる所
にて嶋主をタマハマと名くと云り扨此島の土人の風
俗僅に十年か十二年の中に大に變したる事ハ嘗
てノヲレス名人此處の土人チアヒナと云る者を伴ひて支
那の廣東に至りし時チアヒナ廣東にて見る物每にハ
是ハ銕幾許に換る哉彼ハ銕何程に當る哉と物每

に鉄の事而已尋問ひたりしか彼ら貴重とする所鉄
に過ることのなかりし故爾後此島人等欧羅巴人
と交り数歳かしても今や鉄類ハ貴さよりに成
たるハ彼等か既に華奢に成りたると見ゆ 腕
チアヒナハ此島のアチユアイと云ふ處の首酋なり
かくて陸より我船に来るへき船もなく見へしを
あれハ予船とかしの帆を以て六時に此嶋の南西
に遣を夫より南に向ひ夜中此島に沿て行んと欲
せ扨以前のことく食料を買入られけれともいまた十分
ならさる故此島もカラカキュア湾にて猶食料を求ん

と欲し然第一時より舶を北に遣りけるに同時に
モウナロア山ハ丑癸間ヲワイヒの南陽ハ丑の方に見へ霧
深く全島を見ざりしかども舶よりの距僅に十里
に過ぎて八時に風ハ北に向て弱くカラカキユアに至る
に便ならざれバ是に於て予思ふにかく風順ならずして
はカラカキユアに至るとも又時日を費すべしカムサツカ
にも第六月の中旬比にハ必ず着すべしと欲する所
也ハ今より直にカムサツカに向ハんと欲しドクトル、
エスペンベルグをして舶夫等の無恙なる哉を診察せ
しめしに舶夫の内にわづかに敗血病の徴見ゆる者

ありと云れバ予思ふにもしハ今程カラカキユア港
に寄て新鮮の食料を多く備へたらんハあるべくもあらざれども
予ハカムサツカの着を急ぐハ今年の内モウリン風使なる
時に長崎にまでいたらんと欲してなれども舶夫
等の病あらんに於てハいかにも緊要の事なればハ縦令
時を費すとも猶新鮮の食料を求むべしと諸士と
議定して直に至りて好き食料を多く備へべし也
益既に三ヶ月以来舶中我等の食も舶夫等と同じ
き物より外に得ざりし故に諸士等も此に至て新鮮
の食を得て共に悦を極めし所に甲比丹リシヤンスコイ

予なりも期限の百餘あれハ我より先にカラカキユア
港に寄せ夫よりコージヤクに至んとて既にカラカキユア
ニ至り居りしや
夕六時ヲワイヒの南隅我舶の北東八十七度モウナロー
ア山の東側ハ北東五十二度に見ユ此両変ハニコウヘル
の図に緯十八度五十八分経百五十六度二十分と
し我此より離るゝの表とする所なり七時東風吹
起る此にて子ワ舶と相別るゝ予ハ南西に向て舶と
遣り予か舶ハ緯十七度の距等圏まて経百八十度
にまて至らんと欲して然り何者なれハ二十度或ハ

二十一度の変より八十六度十七度の距等圏とも此
海上ニ於てハツサートイント風の名の能吹く故なり此針路
ハ千七百七十九年安永八年甲比丹ケレルケの針路と為
彼のサンドイク諸島より支那ニ到りし時の針路の中
間に在ると是予亦敢て一二の発見もあ
らん事を謀てなり
甲比丹ケレルケの針路先ニは二十度の距等圏に
て経百七十九度二十分に在ふサンドイクより支那
ニ至るハ十三度の距等圏ニてマリアナ子ン島盗島
ニ至れり

第六月十一日我舶正午北緯十七度五十九分四十秒西経百八十五度〇〇三十秒にして昨夜八時已後の風潮に北に十五里西に八里舶を漾せしを知る此風にて次の両日も吹けれは緯十六度五十分経百六十六度十六分になる月離の測両行を以て此日の正午の測を比量し経百五十七度五十八分とそ一二八号時計に従は百五十八度〇〇なりホルネルの測も予か測と密合せりワイヒ島諸隅の経度と此と比考し我等か時計の修正せしは一二八号は「ミニトカタリ」にてある如くに復す即二十四

秒一八五六号八半秒と多とそ即二十七秒五の如くに同し「ペンニングトン」は二秒とかとそ即十五秒なりとすかく時計の差と正しくなるも亦唯そのとき所とその而已にして此後数日の間其差の同位に在るを以て手定と定へしとそ第六月十二日より十八日まて六日の間天気晴朗にあらされは月離の測を為して経度の考を詳にすることを得さりしか此測にて利を得たる初めの日の前は時計の経總て四分四十九秒東差と終の両日は六分十一秒の西差と現そ此六日の験と此考平均すれは東差は五分に過そて西差は僅に二分

而已ホルテ子ルの此考も亦相同しとてサンドイク諸島に
於ての時計の行に疑を起すへきの先謬ハあらす僅
なりと知りぬ何となれハ三箇の時計の互に違ひあれハ
唯二秒時のミ我等此於テハ為し得る月離の測に
大なる差ありと顕しあれハ是ま氣候に大なる変
あるに因て来る所とす今我等の諸測量を以て於中
し一二八号ハヲワイヒの南陽にて西経百五十五度
十九分十六秒とす「コーク」「キンク」及「コウヘル」の實測
にハ百五十五度十七分三十秒とする所なり
第六月十八日我輩緯十七度経百六十九度三十分に

在て彩しき鳥の群を見し船の周囲に飛廻るとえ
あり是此邊に國土と覚えしき徴とす夜清朗
にして我等意を用て遠くと眺望せしに見得る所
なし然とも夜中ハ空しく来過ぬゆへにし然而其邊
に島嶼若礁石の彼鳥の集る所もありやと意を注
きけりて夜明ても多くの鳥の飛を見る所書午
の比に及ても鳥ハ何所にか飛去り見へすなりたり
ラベロウセ千七百八十六年天明六年と千七百九十六年寛政八年
初ハ二十二度の距等圏終ハ十八度の距等圏に航
しサンドイク諸島の西に二ツ巖礁の嶋と見ゆる所

甚き船の為に危くなりしと平常故に船夫等に令
しおくと之を見出しぬらん者ハ常の賞にかへて倍し
て之を償ふ為しと令して船夫等を励ましぬり
子ワ船の亜墨利加より支那に往し時千八百零
五年文化二乙丑年のなりし西経百七十三度三十八分
四十八秒北緯二十六度零二分四十八秒にて甚
危き砂洲に遇ひたりとなり
第六月十八日我船緯廿七度三十分経百七十六度
四十六分にて針路を北にして緯十九度五十二分
経百八十度〇〇なる亥の方に走り此日甲比丹テレルケ

の針路をとりて直に之を離て多く西に遣りたり而
サンドイク諸島よりカムサツカに航するには務て彼の針
路に悖ざかりて百里若百二十里を距て走りたりけり
我船夫より北にては風止て変し易かりし廿所にて
は天氣甚殊しハッサート風を堪え吹て船の走り一時に
七マイベレより少かくして且海上全く平にして船と
漫漾たるの高浪なりし甲比丹キンクは此に甚き浪を
憂たると雖偖は甚き冷にしてラルモメイテルの氷浪二
十一度より纔かなりし大陽高度ハ八十三度八十四度
と雖もテルモメーテルハ毎に二十度に降るあり羅針

の高下差ハサンドイク島を出てより續て高さを増し
緯二十度經百八十度にて最高となる東西差ハ
十三度二十分の小東差なり但此より亦漸々カムサツカ
に着してハサンドイク諸島に在し如く四度四十六分の
東差となり
第六月二十二日の晝午ハ太陽高度殆んと九十度に
て之を測るに難かりしなりホル子ル既に預め正午の
實時を算して以て正午の高度と瞬時に測り此高
度より緯度を測て海と赤道の算と二分時に相合
し我等數日已前に測算せし緯との差となしなり

此日夏至線と西經百八十一度五十六分の處にて
海の色多に二日の前の風に連りて其日の同様
時ハ海と小かしの動なく實に平和る鏡の如し此
ハ東海に於てより外に我等ハいまだ見ざる所なく
ホル子ル此風に水性の驗を為んとて小舟に乗てシキ
スのテルモメーテルを百二十五尋の深に入るに十三
度三に降る水面にてハ二十度五 脱 なり即
七度二を差とを同しスの器にてハ唯二度半と見えと
そシキスの器ハ五十尋にて十七度三とし二十六尋
にて十九度七となる故に此緯に於てハ二十六尋に

浬ふして殆んと一度と違ふ五十尋ふして三度三又百
二十八尋ふして七度二シアウミエル也り
此凪の後より涼しき東風吹て好晴の天気ふして緯二
十七度の處より北ふして北東のパッサート風ふ逢ふ
風路ハ南北凡よ南と称る
第六月二十八日緯二十九度三分径ハ月離の測よ
て百八十八度十一分ふして一二八号ハ百八十六度○○
とて此ふして時計の西差四十九分の多きふ存ふ次
日ふ在四十三分三十秒の差して諸測ふして千中数
と四十四分四十六秒と也そ

緯三十二度の處ふ至て空曇り靄深くて天気ふして南
西の勁風ふ吹く洋風と交へ船の帆の古きとの吹
破らる雖とも帝之を取除しも帝用なし手ま也し
甚ら次日ハ又凪ふして帝自ら小舟と下して水性
と験也したり
第七月二日緯三十四度二分四十一秒西径百九十
度七分四十五秒ふして我舶三日の間の潮ふして丑の
方よ三十七里と漂せしと験知そ第六月二十九日
小験せし所の潮ハ十三分南也しなり此獨の変
ハ我等の思の外なる利ある事也り次日緯三十六

度にて時計と月離の測に改修し西経百九十一度
三十分とせり
亜ラ魯西亜と出会ひ時に「カラーフ」「ロマンツワヲ」并に
甞て昔年伊斯把你亜人及ひ和蘭人の訪尋せし地
のいまた慥ならさる者を驗査せし事を謂へり此
方の事ハ蓋古人の作り物語の類なりし
日本人の地図に江戸海湾の東に巌礁に囲まれ
二島ありと見ゆる疑はしくハ此島を以て此物語の
地となしたる者なりし歟
伊斯把你亜人ハ日本の南に一島ありて金銀に富

ありと聞て千六百十年と千六百十一年慶長十五年及十六年
アカピユルコの一船を日本に向ふて出し其島に擬し
と疑ふ地を金銀島と謂ふ所の島を尋ねしと和蘭人も又
島の金銀多きと云る説されて甲比丹コッテアスクワトスト
二艘の船を以て之を尋ねしむれとも伊斯把你亜人
と同しく切知しと又千六百四十三年寛永二十癸未年甲
比丹デ、フリトスハ「カストリコム」船を以て千七百七十七年
安永六丁卯ラ、ペロウセも共に此島を尋ねて切知しと但
「ラペロウセ」は態と此島を尋ねしまても世の人とも「アーク
グユナラスカよりサントイク島に航し又千七百七十

九年安永八己巳ケレルテウサンドイツ島よりカムサツカに航
せしも甚ダ此金銀島とえしの説なし又テキシヨン
及ハレコウヘル等も總て此を明に為さず予ハ甲比丹
クワーストの航せし距等圏ハ何なると知ずとも之
とも誤くハ、フリースの航せし處に同しかるべし
ラフリースの距等圏ハ三十七度三十分にてゲレイク
の東経四十二度より百七十度に至るラペロウセは同
し緯度にて把理斯の東経百六十六度五十一分より
百七十九度三十一分に至る即十三度四十一分の間を
予ハかく諸先達の為さし事を之に勝りて発明せ

事ハ及ぶべきに非ず殊に空曇り甚く望むに便な
し然ども久来地誌家航海家の疑ふ所の者なりと意
外に至へきに非ずと思ひ東風に乗し船を遣り彼
島ハ東西何の距等圏に従ふへきと定め難く三十
六度の緯に至りし昼年より東風と成り船を西
に遣るに風次第に吹募り夜に及て暴風と成り「ハラ
ムラーヒ」及「ハラムステヒゲヒ」を取入て「マルスセイル」にて船
を走らし翌朝六時にすこしハ減しられども漸くに
南に廻り天気ハ昨日のごとく曇濁し本思ふまゝならず
予案ずるにハ彼島を見ずして過ぎるも非ぞ雪知ふ

の針路ハともかくも我為にハ正しからざりし朝八时
に我針路を北に向ハしむ是三十六度の距等圏に
て二十时中に三度半西せしめたり至りし夜に空晴
朗となりたりし此时ハ既に我針路を変さし後なり
るか天氣の変りたれハ風も亦変ると思ふに
果して至午より南西より吹而后ハ庚申間より吹
て我等に向ふと謂て海上ハ不断霧多く眺望を障
り島嶼を発見すべき由なし緯三十度よりカムサツカ
の濱に至るまで我等ハ殆んど霧の中にのみ走り
たるなり又此緯度に於てハ常に西風多く西より

東に乗行しハ此に反して航するに勝手なりとそ
第七月六日の至に大なる亀を見たり午后に小舟
を下して之を捕しめんとせしに舟の至るを見て彼ハ
水中に入りて捕へ得ざりしなり此时北緯三十八度
三十二分西経百九十四度三十分に在り千七百八十
八年（天明八戊寅）ノアレスも北緯三十八度十七分経百九
十四度五十分の処にて大なる亀を見たると記せり
然るも我等ハ彼ノアレスの発見せし土地を見ず風ハ
軽く霧多く雨を催したり
第七月七日緯四十二度三十四分経百九十七度〇〇

に在て白鷗及大なる黒き鳥と（見ゆる是ハ土地の）見かくべきことを止
風ハ南西より北東に吹く強しといへども海ハ全く
浪なく平なり是も土地の近きにある故ならんとて
然れども唯霧の掩ふたれバ土地を見出すことを得ざり
し

第七月十日緯四十七度二十分の所にて風甚だ劇
しくマルスセイレンの段分を重ぬるほどなり翌日晝
午ハ緯四十九度十七分經ハ時計に從ハ百九十九度
五十分にして是実に土地に甚だ近付しことを證して
白鷗野鴨雲雀の二種灰白色にして背に黄線ある鳥

大鳥の「アルバトロス」に似たる者等を多く見たり
第七月十二日朝八時檣上より土地を見付たるに
壬亥あたり戌辛あたりに亘る我船より九十里或ハ五
十五里を距たり其地の經緯度を推するに應にポウ
ロトノイ岬なるべし諳厄利亜人地図にはカハレア岬と
名づく是なり之を見る内に迷に霧にて掩ひ見えず
なり夕八時に又之を見たるにポウヲロトノイ岬の緯に
當れり即北緯五十二度二十一分なり是カムサツカ
濱の高峯にて我船より其時正に西に當り見ゆる
なり

翌曉に北に當て多山の地と見ゆる方至と考ふるに
シキビコンスコイ、ノスの地方なるへし　此岬ハカムサツカ
海濱図に載る甚た違えを而して千八百零二年享和二年
ペテルスヒユルクに出せる所の地図に此「シキビコンスコイ、ノス」
ハ北緯五十二度五十六分強　東経百七十七度
三十八分「ゲレーンイク西経二百度零七分とせ　又アドミラ
ール、サリーツエフ」氏の図にハ北緯五十三度の二分西経
二百度十五分とせ　コークの第三の航海図にハ北緯
五十三度十分西経百九十二度五十分とおくり從て
甲比丹キングのカムサツカの紀行にハ　此シキビユンスコイ、ノス

岬と両處に至く即コークの第三航海紀記第四編三百
十葉にキングの説と附せ即ガハレア岬の「シキビユンスコイ、
ノス北緯五十二度二十一分西経二百零一度十二分
とし三百十一葉にアワツカ湾口と北緯五十
一分西経二百零一度十二分とせ三百十葉に從へハ
シキピユンスコイ、ノスの北緯五十三度十六分西経百九十
九度二十六分アワツカ湾口ハ北緯五十三度十六分西経
百九十九度十五分なるへし　此違ハ蓋し謄刻の謬誤
ならん　我等の測に從ふに　シキピユンスコイ、ノス」ハ緯五十
三度零六分経二百度十分とせ

此日終日風止夕に及て南風来り船を彼濱に近つくる太陽の雲に傾比に五の山を見てカムサッカの濱なりと明にそ是ハ甲比丹キングの図に詳に載ある所なり夜中ハ風又止朝四時に涼風起り船を濱に寄を断し丙巳間の風となり晝十一時にアワツカ濱に入一時にシントペテルエンパウル港に着より是ヲワイヒ島を出て三十五日を経ブラジリーを去て五ケ月半を立て此地に到着せる也此時船中に只一人の病者ありしか八月を立て此か全く快復せしなり

奉使日本紀行

青地盈譯
高橋景保校

第十一篇カムサッカ逗留日本に向

我等ペテルパウル港（カムサッカの海港）に着して未たカムサッカの總管ガテーノ（名）爵ユセレッフに逢ス彼ハ此より七百ウエルスト（一ウエルスト十町に當ル乃ち我百六十一里余あり）を隔て下カムサッカに居せハ使を遣て其来を請ふに少くも四週（七日を一週とす）乃二十八日を俟へし然るに此ペトロパウロイスコの官司マヨイル（名）爵クルフスコイ厚く我等を待て使節（レサノット）をそ彼り

舘の別室をかし居しめ我船夫等に新蒸餅を
与へ船へハ日毎に鮮魚を贈りぬ我等已に五ヶ
月半ハ海路を経て新鮮の食物に乏しかりけれハ
厚く彼か志しを感しぬ予も船中の諸戒備を
解きて休め諸物を陸にあけ船は濱より五十尋許
ハ處によせ船具帆等を繕ひコロンスタツト（保按峨羅斯帝都の西海）
出帆の處より積来る構築の諸材を水揚し其内鉄
六千ピユラ（量各一ピユラ凡四貫目乃二万四千貫目）あるを揚るにハ時を費
さんを恐れて船に遺し置ぬ是予か意此より
長崎に往にハ北東のモウクヽつ（風名一歳中に六月替り吹風をいふ）

ハ吹るしむる前を宜しとすれハ遅くとも十四日
の内に此より出帆せんと急ぎし故なり然るに
此港の逗留四十日を過へきになりて其内二十日
になりハ船の修理等に事多かりしか其後未た
出帆の日も定まらす終にその暇に彼鉄をも
尽く陸に上け其後に軽荷（船底に入る砂石をいふ）を積入しまた
日本官家へ進物の品その内鉄細工ハ海上を
経て如何なりしや使節自ら改め見らるゝ為に
是も陸に揚ぬ彼軽荷を運ぶるにハ往時ヒルリンゲ
ハ此港にて沈めしスラウロツシイ（船名）を用ひたる

小舩二艘を求めそれにて積入しあり
千八百四年（文化元年甲子）第八月十二日我總督（官）此處に来着せり
其弟と甲比丹ヘヲドロッフ並に歩卒六十人将て来り
ぬ「レサノフ」の望に由て歩卒をハ引来きるなり
其後八日を經て我船ハ出帆の日を議定せり
出帆にてハ總督（官）も此處に逗留ありて此一件を
務めハ我輩實にその恩徳を蒙きり扨使節に
從ふ諸官の内此にて替りたる者ロユイテナント舘
がら（シッポ名）爵トルストイ（人名）醫官プリシキン畫ユキエルラし
ゾッフ等を此處に遣し皆ペラルスブュルグ（俄羅斯都名）に

返し此等の代として甲比丹ヘヲトロワリ（人名）とロユイテ
ナント、コセレッフ（總督（官）の弟なり）を使節に從ふカハリイル（役名）
とし又使節の陪卒として兵士八人を撰ミ日本
に從へ事終りて復此處に送り返さんと約せり
又キセレッフと云日本人をハ此度日本使節の通事
として從へへきに彼が様子好からず且彼ハ
今俄羅斯人となりたれハ日本人に嫌ハ憎まる
へし使節の意にも彼が耶蘇教に入たるを日本人
に志らしめて心痛の事あらんも計りがたし
とおもひて彼を從へん事ハ止め又ニユカイク（地名）

より棄て来りし拂朗察国野人をもカムサツカに遣し置〆

船中の碇工某此旅行の始めより病のきざしありて伯西児（フラジリ 地名）を出し以後甚い羸瘦しカムサツカ着後病愈重りしか此頃ハ少し快くなり〆醫官エスペンベルグ之を察して労療の始めなれい此處に遣し置へしと云へり予もその病の再び重り日本に到らん頃病変あらんも計りがたく思い此に遣し置んとせしか彼意を決して自ら許さらい縦い船中の同伴と共に居て船中にて死するとも此處より独国に返るを勝まり且我病ハ精烈い飲料を貪りたるより起りたれい向後之を慎むへけれい是非共許して船に置きよよと請いしゆへ其意に任せしか船中障りなく全快して本国に帰着せしなり

第八月九日（九日と云ハ誤りなり恐くハ二十九日ならん）即我らハ船の用意全く調い三十日にベテルハウル港を出てアツワカ湾の水場より半里ある處に碇す次日總官諸官と共に船に来りしかハ我等之を饗應したり是總官い恩を謝するなり

第九月五日に至りても天気はれす霧雨降りつゝき
南風又は東南風又は東風と替り吹一時の内に
風南と東と吹替り船中欝々として此に滞留せ
しむるに總督（官）より一吏を運漕船に乗せコサツクと
野牛の類未詳二疋馬六疋を送り冬中の食料とすへし
とあり此は總督（官）の家畜にして其備畜を尽して
我等に賜りしなり又別に官府の料とする牛
三疋と其家の牛二疋を合せ賜りし牛はカム
サツカ地方に乏しけれは甚た貴し前に云へる
ごとくペテルパヴル港より上カムサツカまては四百

ウエルスト我百十一里余下カムサツカまては七百ウエルスト我百六十一里余
の道程なり然るに彼牲畜を僅か二十日の間に此に
取寄られし事其速なるに驚き又總督（官）の事に
調練なるに感したり且使命にて云船に備ふへき品
は遠處といへとも力に及ふかきりは何にても与ふへし
必運送の容易ならさるを憚り糧料の備を缺
へからすと其後も又属吏セメノフをして船の糧
料数品を送られたり

出帆前にカムサツカにて備へし食料は總て牛七疋
下カムサツカ産の乾魚塩魚数十桶上カムサツカ産

の蔬菜並ニアイハカマ蒜類ハ三桶此品ハカムサツカニテ
ツエレムスカト名ケ敗血病（船中ニテ煩フ病名）の良薬ニシテ
酸味の蔬菜ニ代用シ又此ヲ泡出シ飲料ニ製ス
ヘシ其他諸獣肉等アリ我等カムサツカニ著スル
前ニハ船中の臭キ外ニ肉類ナカリシカ著後ハ
レンデトレン（獣名）アルガリ（小羊の類）雁等の美味ナル肉ヲ得タ
リ是亦總官の恵ニシテ畢竟我等カ今度此ニ
来ルニ由テカムサツカ中ヲ動カセシナリ
第九月六日ハ西北風トナリ帆ヲ張ントスル時總官
小舟ニ乗来リ出帆ヲ祝セラル帆ヲ張リ終リタレ

ハ陸の砦ニテ礮ヲ鳴ラス十三響シテ出帆ヲ祝
ヘリ船ヨリ同数ハ礮ヲ鳴シテコレニ應セリ但
此時風徐ニシテ潮ハ流ト小舟二艘ニ牽レテ
漸クニ進ミシカ晌午ニ至リ潮満タレハ止ヲ得
スアワツカ湾の瀬戸口深サ七尋アル處ニ碇ス
午後ハ風モ涛モ東南ニ向ヒ霧雨降リ来レリ
予二人の船士ヲシテ瀬戸の両辺濱の深サヲ測
ラシメ甲比丹コークカアワツカ湾の図ヲ験シ此ニ
境スル三處の港の全圖ヲ作リヌ
翌七日の朝北ヨリ徐ニ風出シカ直ニ吹ツノリ北風

に来りて船を海峡より出し第九時辰半時には已に
海峡を背後に見るまで来出せり初は東南風吹て
南差南東風又南差東風となり東南より来り
しく涛起りて少しは船の走をたにたらしむ但風
甚だ冷に霧雨交り降りて晴す第十一時四十時にスタリ
ツエッフと云小島自注此島は此島に住る島主の名に因て名けしなりを船より西の北八
十度此処羅盤の度数なり下之に倣ふに見瀬戸口の岬よりは北より西
二十度に見へたり其後は霧稠くなりて午時
には全く見へずなりぬ此夕第六時にポウロトノイ
岬保按するにカムシヤツカの東岸の岬なるらんを北差西の間に見たり然るとし

此も稠霧にて只一瞬間見しなり夜中風強く涛
高く暁に至り風は弱りたれとも涛の高さは昨夜
のまゝにて時節はたゝれぬ如何にもして速に暴
れて東南濱に至らんと思量して甲比丹セシルケの針
路とゴレの針路の間を航らんと定めり是はゴレの針
路北緯三十六度径度二百十四度の処にて横に曲
り通りて日本海濱に延つゞくへきなり
ベチルバウル港逗留中も不断霧雨がちなり天気なし
て出帆の後も続きは已に十日余も日光を見ず
船中の衣被を乾かす時なかりき十一日の朝は大雨

ふり東風強く遂に海颶となり爾後第五時七半時
尤も劇しく大涛高く起り夜半に及て少しハ
静まりたれとも翌朝までも猶止ず狗午の
頃に漸く静まりぬ又次て北風起りてますます
吹つのりしが東より来る涛ハ烈しくて盡くの
帆を張てハ風に任せ走り得ず又前の颶にて船
に漏水出来水入ること絶へず之を汲出さしむ
此船ハカムサツカにて念を入れ修理をせしが其
漏水ハ銅板の下なりしと覚ゆ後長嶋にて験せし
に果して然り此日海上にて多く鯨を見又諸島

夥しく飛廻り其中にハ飛に倦て船上に集り船
夫手にて之を捕へたるもありき甲比丹「ゴレ」も皆
て北緯四十五度の上にて我よりハ少しく陸により
たる處にて諸島の多く集るを見てクリル諸島に
近きを察したりと

カムサツカを出て後颶風などあり天気多く殊に十一日
の颶にて船中の生牛三疋ありしも温捏いなりけし
さは弱りて復蘇生すへくも見へざりき
十五日の午正にハ大陽あらハれ之を測るに其處の北緯
三十九度五十七分三十九秒時辰儀にて経度を測り

しに二百零八度七分三十秒（注：盈諳尼里亜都府ロンドンの測量所あるの地グレーンイケより西に張る）（の戸なり）テルモメーテルの候ハその前ハ僅ニ八九度の温なりしか今已に十五六度となれり此処の気候の大に替ることをしるへし十六日の彼（一本ニ夜ニ作ル）羅盤の差を二次験しに一度七分と二度三十分を得て平均して一度四十分三十秒の北東偏差たり此時船ハ北緯三十八度四十分経度二百〇九度二十五分に在然とも船の盪揺不断なるけしくさしく羅盤の傾を精密に見るを難し ホルネル人名の測に北緯四十八度三十分経度二百の一度四十分の処にて羅盤の差五十九度三十分

なることを見たりと

又雨降東北风にて涛高し此风ハ我為に順风にて船の行捗八九コノーベン（盈梅海上里数を唱へるの語なり一時に幾コノーヘンを走るといふ此例数なり 一コノーブは我六十四丁半に当る八九コノーベなれハ十四五里を二時に行くの比例なり）より歩かし寸といへとも船の走れは风の強きにて船に水の入ること一時毎に或ハ八寸より或ハ一尺に至る但风を脇に受る時ハ水四五寸に過ぎず此に由て漏水ハ必ず船の前部に在へきを察せり

ラペロウセの海圖北緯三十七度把理斯の都府払郎察の東百四十三度三十分グレーンイクの西二百十四度二十分

の所ニ無名島四又ホルカノ（景保按薩摩南海小島の内）と名る島
北緯三十五度経度二百十四度の處ニ置其少し南ニ
前より小なる島一を記す又ロルトアンソンか伊斯把
泥亜のカバタンゴの圖ニ見なると云島をアンソンか
紀行第三百八十五葉ニ載せ千七一六号の島と千
六六四号の島を記す其図ニ従ふニ千七一六号島ハ
北緯三十五度四十五分シント、ベルナルヂノの東十九度ケ
レーンイクの西二百十六度三十分とし千六六四号島ハ
同子午線の三十五度と記すホルカノ島ハ此二島の南
三十四度十五分ニ置又三十三度前より東二度許ニ

ベンナ、デ、ロス、ビュス一島とバイロ礁とを記すアルロウ
スミト名入ハ此等諸島ニ考験なかりしと見へ其海
図ニ載せすアンビルか図ハ此頃払郎察国の学士
の校正せる新図あり甲比丹「ゴル」と「キング」の針路ハ遠
く日本海濱を離れ前の諸島の北を通航し甲比丹
コルチツトハ支那より亜墨利加ニ往て千七百八十九年（即寛政元年）
此諸島の南を通航せりこしルコルチツトル晴日ニ之を
過し故ニ此諸島を能見たる下予今の航海ニ此諸島の測量
をなさんと欲し地図の位置ニ従て針路を此諸島の中央ニ
取て彼無名の四島北なるホルタの島ニ千六六四号島南なる

小ホルカノ島とハ測きり但十七一六号島ハ船より
七十五里許も離を過し西へに見ゆるを得す十八日の
夕五時半時（七半）に西に當る島を見たり船ハ緯三十
六度径二百十三度四十五分の所なりし々暫時に
雲出て小島の形ハよく見へて分明ならすその
島なりと見し方々第七時（六半時）まて氣色しし々
暗くなりし地方を見るてとなく夫より前の針路
南西に向ひぬ
此夜晴朗なれハ第八時（戌時）に月と河鼓第二星の距を
測るにホル子ルの験に西径二百十四度三十分三十秒

を得予ハ一二八号の時規にて二百十三度五十七分
四十五秒を得たり又一瞬間に二百十三度五十
五分となりぬ船ハ盪程不断甚しきに此測量
の適合すゐかくのことし又次の夜も測量し船中
の時規の差規ハ差誤なきを比験したり
時氣の變速なるハテルモメーテル今ハ十九度より二十
一度の間なりサントイク島よりカムサツカに往し時ハ
夏の半に此と同し緯度にて只十七度の温なりす
北緯三十度の處にて其温二十一度に過す第六月
七月に温の度かくのきハ此地方ハ欧羅巴よりも

大陽の温気を遅くなふるゝのなるへしと云

カムサッカを出しより大洋にて不断東北或ハ東より起る濤に遇程られ弟九月二十日我北偉三十四度二十分径度二百十五度二十九分四十五秒の處にて始めて波の静なる海を見只東南の冷爪ある而巳是東南の方に国土ありと思へとも見る所なし此日又始て多く魚の飛躍りドルヘイ子こ鍛及雁鴨等を見たり此等ハ北方にハ寡く地方に近きに非されハ見さるものなり羅盤の差ハ十八日十九日の験に同しく其差一度の外に出す其変甚しからし此に由て海あれの時も常汐の減より

奉使日本紀行

阿蘭陀人千六百四十三年寛永廿年の航海に見出せしソイデルエイランド南島の義即ハハツイジヲ島八丈島の南小笠原島に當る一是を験せんと欲せしか其路に至る頃東差北東風烈しく空暗く雨降て望を達せすコル子ットり針路ハ正しく其島の近きにあれハ其径偉度を詳にせしなる一此人ハコーグの教育せし航海学士にて千七百八十九年寛政元年と千七百九十一年寛政三年に此海に航せしに其紀行

大陽の温気を避くるものならん歟
カムサツカを出しより大洋にて不斷東北或ハ東より
起る涛ニ逼揺せられ第九月二十日我北緯三十四度
二十分経度二百十五度二十九分四十五秒の処にて
始めて波の静なる海を見只東南の冷気ある而已
是東南の方に国土あることと思へとも見る所なし
し此日又始て多く魚の飛躍りドルヘイ子と鯨及
雁鴨等を見たり此等ハ北方にハ寡く地方に近き
に非されハ見ざるものなり羅盤の差ハ十八日十
九日の験に同しく其差一度の外に出す其変

甚しからし此に由て海あれの時も常法の減より
外ならさることを知る
阿蘭陀人千六百四十三年（寛永廿年）の航海に見出せし
ソイデルエイランド（南島の義 小笠原島）ハハツツイジヨ島（八丈島の南）
に當ること是を験せんと欲せしか其路に至る頃
東差北東風烈しく空暗く雨降て望を達せすこれ
子ツトリ針路ハ正しく其島の遊さにあれハ其経
緯度を詳にせしなること此人ハコーグの教育
せし航海学士にて千七百八十九年（寛政元年）と千七百
九十一年（寛政三年）に此海に航せしにいまた其紀行

を刊行せさるハ航海家の遺憾とす彼か航海
の針路ハアッロウスミトの海図に見ゆ又其作せる
千七百九十三年四年（寛政五六年）の航海紀事の序に
前年の紀行も次て出すといへるも今に至り之を
見す千七百九十一年彼か日本海に航せし記録ハ
ゴーラニ君を主としてロルド、マカルト子イ（侯爵の名）を支那（潮）
に送りケーレゼイ（保按支那と朝鮮との間海即渤海なり ゲレーセイハ黄海之義蓋し黄河此海に注くをもて斯く呼ならん此称古来蕃人を聞す近来蛮図に在のミを記載せし成へし）思
ふに此等の著述を世に傳へさる時ハ彼国人等の
五十年来なせし諸航海の勤もいたらいなるを如く

従来の疑論を発明するに費せし時日の労をも
償ふに余理なれハ察する所諳厄利亜の政家に
於てコルネッーとブロウトンの日本航海の事ニ別
に秘すへき事ありて之を世に出さるならん（ブロウトン）
の航海ハ諸発明全備の時なれとも已に七年を
経て未タ其紀行を見す（自注ブロウトンの紀行ハ千八百〇八年に刊行せり是ハ此航海に出て後なれハ此にかく云）彼と同行せし「ハレコウヘ」か
地理家海の術に要とするの著述あり但彼か船
を損せし故に其日記圖書を失ふハ疑あらし「ブ
ロウトン」か船を損したる礁ハ「アッロウスミトの海

図に北緯二十五度テレーン イクの東百二十五
度四分にあり
此夜は爪烈しく空暗けれとも慎ミて針路を南
に向はしめたり日本海の舊図は「カルレホイキ込
「クムブル」テ、ハル」への図ありて八丈島を北緯三
十一度四十分に記すアッロウスミトの圖よりは南
一度三十五度を差へりアッロウスミト」は「タンヒ」本
の圖に従ふなり其圖には八丈島を三十三度十
五分ソイラル エイラント島小笠原を三十二度三十分
に記す自注フロウトヒの図は八丈島を三十三度零六分に置タンヒ」と數分を差ふ

翌朝に東北風やしく静り南差南西に向ひて吹き天色
尚あしく第八時時辰に爪忽変り東北に向ふて烈し
く大雨して爪時々西南して東北に向ひ又は暫時
は静まり又吹出し海上に蝶飛まき海藻の類浮ひ
流る是は國土の近きあるしるしなりまた小さき「コイル」鴫名
鴻船縁に飛来るチレシウス名人之を図したりかく
の如き天気にて船の進ミ甚さ疑しバロウメーテ
ルの候は二十九寸四分六厘あり前に比すれは高
しとすホル子ル儀にて午正を測るに三十一度十三
分径二百二十度五十分とし海上算法を合す量程

東ヲ計ルニ此ニテ二十四時〔一晝夜〕中ニ三百八十一里ヲ經タリ海圖ヲ驗スルニチーメンスタラートノ北半度許ト見ユ此ヨリ針路ヲ北ニ向ケテ取リ「チーメンスタラー」止の真中ヲ航シ國土ヲ見「ーセ寸」「チーメンスタラート」ヲアツロウスミトノ海図ニハ琉球ト九州のタナヲシマの間トシ拂郎察國の刊行セル図ニハ九州ト琉球ハ間トナ寸地誌家ハ緯度ヲ記スルモ此二図ニ符合セリ然レドモ拂郎察人モ諸尼利亜人モ此スタラートの位置ヲ詳ニセ寸予長崎ニ到リシ時彼所ニ在シ阿蘭陀船の甲比丹ミユスケチールク詰ムデ此スタラートハ千七百年代ニ咬𠺕吧ヨリ長崎ニ航スル船爪ニ逢テ此處ニ漂流シ其の時の甲比丹ヲチーメント云シ由ヘ此スタラートの名トスルナリト此ミユスケチールハ予ト懇ニシテ彼書ハ其事ヲ記シタルヲ予ニ贈ラントセシク日本人の情ニテ之ヲ支ヘタリト見ユ其書ヲ得タラハ予ニ大ニ益アリナラン

第九月二十三日北緯三十一度十三分経度二百二十一度の所ニテ羅盤の差ヲ驗セシニ北東の傾一度零二分翌朝ハ零ヲ二分の北西の傾ナリ其夕北緯

三十一度二十分径度二百二十五度の所ゟては
二度四十九分の北東傾あり此三験を平均すれハ
我ヵ過し所ハ北緯三十一度十五分径度二百二十
二度二十分の所なり

二十四日ハカムサツカを出し已後の晴朗にて子と
ホルネルと共に此良夜を空しく過すへからすと
て時規の験をなしたり即月と金星の距を測るに
暁第五時半頃時に測りて二次此を午正の測に算し
て径度二百二十三度二十一分を得る又月と大陽
の距を測る事七次あつて其最大差只六分四十五
秒なり此も午正に改算して二百二十三度二十八
分を得一二八号のコロノターラル（時規の名）とベンニ
ンフトンの時規とハ此日分秒の差なく二百二十三
度十六分を得る一八五六号の小時規ハ二百二十
三度三十分四十五秒を得る月と大陽の距測を平
均し翌日の測一二八号の時規に只二分の差ある
のミなれハ事く諸時規の度分審合なるを験知せ
りもや日本海濱も見ゆへき頃なると思ふ所に
小蝶陸鳥も飛海藻樹枝草葉など波に漂ふを見て
国土の遠く隔ざるを知りぬ

第九月二十八日朝第十時〈時辰〉に日本海濵を北西の方
に見出たり此時月の距を測りしに昨日といふ一二
八号時規に数分の差あるのミ又針路を北西に向
け西南より徐風あり午正を各セキスタント〈測器の名〉
以て測るに緯度三十二度零五分三十四秒一二八
号時規の経度二百二十六度二十二分十五秒を得
たり羅盤の方位北の西二十八度に當て数小島あ
る前に高岬を見船より凡三十六里を隔てり第四
時〈時辰〉の頃風強くなり其地に近つくこと宜しからされ共
日已に西に落其地を距こと猶二十里に過たり此辺

の海百二十尋にして底に至らす其地羅盤の方位
北の西二十度三十分より北の西四十一度に延さ
り彼高岬ハ其南東隅と見ゆ此よりその岬の経緯
を測るにハ差違ありとも数分に過へからすと思
ひ試みに之を測量するに緯度三十二度三十八分
三十秒経度二百二十六度四十三分十五秒を得た
り是彼四国の南隅なるへきを察せり此岬より其
地の北に坳りて小湾ありと見へ又北向の濵と西
向の濵とを見たりその湾より其海岸ハ西差北西に
向へり其隠處に又小湾ありと見ゆ岬に近き地ハ

山多く湾ニ至るニ従ふて其地漸く低くなり湾ニ
至て又高く湾ハ後ハ低く大なる峡となり其東境
ハ低き山を連ね西境ハ峻山ニて其内二峯の高
く秀たるありて海濱の標と見ゆ

予猶此海濱を詳ニ験さんと欲するニ翌日暁羅盤の
方位北の西十度ニ当て国土あるを見直ニ鍼路を
此ニ向しニ天曇りて其地を見失ふのミならす一
里（諸尼亜里）利の外をも見る事能ハす北東風烈しく雨
降て予か眺望を失ふのミならす卒尓ニ船の其地
ニ近つき觸んも計かたく此か為ニ針路を西差南

西ニ轉セしニ夕まて至り風ますく烈しく雨甚たし
く是ニよりて翌朝まては船を風下ニ乗下へしと
議するに夜半ニハ風猶つのり大颶となり船を東
の方に流し翌日も風雨止す帆をさけ低くして東
北方ニ流し置けるか尓後風弱り南東に吹向ひ暁
ニ至て空晴られハ又船を地方に向けたるニ南東よ
り起る涛甚たしくハロウメーテルの度頓りに降
り悪風の起るへき徴と見へぬ但午正ニハ測量を
得て緯度三十一度零七分経度二百二十七度四十
分を得たり然るニ南差南東より大風起り又雨甚

しく彼地方の濵を見ることを得す第十一時亥時半まて
船を西に向しつ夫より南と向ひ船に堪ることの
帆を張り風に任せたらんとするに南東より高涛
天と共に滑起り大陽は光り淡色に見へ南東より
遽に雲起り風殊に烈しく第一時午時半には帆柱の
錺も鉄帆裂細切々になり船夫等力を極て働け共
帆の乱を収め得す其風の猛勢と困循（困り循ふ）へき手たて
なしされは彼て支那日本の海濵には烈しき颶風
ありと聞しか思ふよりもはけしくおそろしきは言
語に述へきもあらて實に画にたとへ見すへき態

なりたかくのごとくなれは如何にしても船帆を繋く
固むへきやうなく船は怒涛と乗して毬をなけうつか
如く只今にも檣の折挫けんことを待つうなりバ
ロメートルの度非常に下りしか第五時申時半に
は盪揺のはけしきに其水銀日盛より下とありた
まれて見へろうすなり其已前は二十七寸六分
にてありしか振動にて中度の上下の昇降するを
四五分なりしかれは其四分を除て二十七寸二分あ
りとせん此振動なくは適に二十七寸若くはそれ
よりも減すへし如此にて三時にして復前のごとくな

り晌午に至て二十九寸三分となる前の第五時に
ハ二寸と四分寸十の一低かりきハ此に由て思ふに猛
暴なる颶風アレンナレン諸島の辺に於てハ猶烈し
きこともありといへハその時にハ「ハロウメーテルの
度如何あらん千七百七十一年明和八年第一月十二月コロ
ン名人グテ、フランセ島辺にて逢たる颶風にハ「ハロウ
メーテル二十五フランセロドイム佛郎察の寸法なりなり
しと今よりハ三分半低かりしなり此に由ても此
度の颶にて二十七寸に降りたるを證すへし
此颶風にも船ハ檣の折るまてハ危かりしと思へとも

外に懼るへきハ東差南東風にて船を吹送られ且
其濱崖を去こと遠からされハ今十二時を過るハ崖
に吹つけらるへしかゝる烈風にてハ船夫の力に
て救ふへきやうなく只是のミを恐れぬ然るに夕
第八時に至りて風西差南西に替りて始て其危を
免れたり然とも風の替るとて船の後より濤を打つ
け船の左辺より水入て船中の水高三尺に及ふ図
書等の水に壊されんを恐れて人々之をかきつけし
暫時ありて幸に止ミたり此時船の舳帆を張りも
し風に従ひ進まんとせしに帆を未さ張たりしを

多く風又烈しく第十時になりて漸く風勢弛ミ「バロウメーテルの度升りてもやゝけしき率しあらしと喜ひぬ夜半の頃あらしはゆるミたれ共風ハ猶強く止まず是ハ我等の願ふ所なり如何にとなれハ東差南東より起る涛に相敵する西差南西の風なれバ彼暴涛を速に鎮むへき者ならん此風なくハ船の為にハ猶已前にまさる危難なるへし船の漏水もあらしの内ハ棄たきぬ是漏の水一時に七寸より一尺までの増なれハ颶の内に増ともも一尺二三寸に過へからす遍揺をけしは時ハ水

を汲出す事甚ハ為かたき故なり

翌日ハきのふに替りたる美日にて船の取みられたるとかくつけ綱索を修理す風ハますます鎮り西風となり帆の繕ひ終りて晌午に船を北に向け夕第六時酉時に西差北西十五里許の距に陸地を望む夜中風ハ静なれ共波ハなほ平ならず船を稍東に漂ハせたり次日第九時半辰時西に當て陸地を見て漸くこれに近つき午正にハ其距三十六里許となる其地ハ羅盤の方位北の西四十三度より四十八度に延ひ其緯三十一度四十分其徑二百二十七度四十三分三十秒

午第二時（未時）より其距二十里許夕第十時（戌時）にて
は風なく船進まずして北東風吹出し陸に近つ
く猶教に半（至々）羅盤は此時三度零一分の北西差な
り

其地は山多く高峻三四嶺を重り見ゆ其北東の端に
さし出たる高岬ありテベリンクの同行の名を取
此をチエリユウ岬（保梅日向国東岸の岬をいふ）と名く其緯三十
二度十四分十五秒其経二百二十八度十八分三十
秒と寸又其西差北西に海湾ありて其東隅に高く
畳たる岬あり前の地に属するものと見ゆ其北を

コクラ子岬と名くコクラ子は諳厄利亜国の大船
にしてテ嘗て其船にて三年間従事せしあり此岬の
後に円錐形の高山ありて其處は高く東に向て陵
遅せり是はコクラ子岬の通りに峻山ありとする
の徴なりコクラ子岬は其緯三十一度五十一分其
経二百二十八度三十三分三十秒と寸九州全島の
方向は南西にて十五リコフ岬も其同向と見へたり
コクラ子岬の北濱は高く南は低く其低き地に一
高峯の頂き平なるあり又其南に低き山三見ゆ日
の西に傾く頃我等陸を去て十五里許にして能之
陸

を眺望より其地羅盤の方位北の西十五度より南
の西六十五度に延てその所に高岬ありて限とす
又西方に差出たる地北より南に至り二十里許あ
るを見る之を望に狭き島の如くなれとも察する
にやはり彼地と續きたるものなり其北隅ハ
緯三十一度四十八分南隅ハ三十一度三十八分径
度ハ二百二十八度三十分とす
夜第十時戌時に東差北東の徐風来り船を南東に遣る
暁第四時寅時に北差東の風起り幸に船を陸に向し
に風強くなり船を南に漂はしつ朝に及ても船猶

彼地方と離れす昨夕西差南西に見たる岬ハ船よ
り北の西三十七度羅盤方位にあり其山南東に差出最
も高く且此を拂郎察国の地理家「アンヒル」の名
を取てアンヒル岬按日向国南尽頭岬を指すと名く是此学
士の教誡輩に益多けれとも今に至る迄地図上に
彼か名を著はすことなき故にまうく名けしなり此
アンヒル岬ハ其緯三十一度二十七分三十秒其径
二百二十八度三十二分四十五秒なり其濱ハ西に
向いて他島と見ゆる山に連り見ゆ第九時半辰時に
其北東側に大湾あると見てアロウスミトの海図

に琉球島と種ヶ島とを置なれハ北海湾なる事と
寸自注近時刊行のアロウスミトの南海図にハタ
子ガシマとリウキウの間のデーメンスタラー
トを全く除き只タ子ガシマを北緯三十度四十三
分東経百三十一度の八分に記載するのみ
其湾の南西にある地の如すし其緯度してる図
と合すれハその地ハ琉球なりんと思ひしに長崎
逗留中日本人の言を聞ハテーメンスタラートの
北にある地ハ琉球に非す薩摩の国なりとテ、アこ
としの地図にも之を載する所なり是に於て予ハ
誤りを知て阿蘭陀通事に就て捜索せしにホルカノ
島景保按薩摩南海小島の内の位置其海濱に近つきたる處なり

海濱に近つきたる處なりと我船の通行せし方を彼
等よくしりて自注第十月三日始めて我船を日本人見付てよりハ日々之を伺ひ長崎
ハ上司に告しらせけるゆゑ我船の通路を彼等ハ委しく知居たるなり言へるハ琉球
と名くる大島ハ日本濱に近かりすと此に由て考
諳厄利亜刊の図にハテーメンの北佛郎察刊の図
にハテーメンの南に琉球島を記するハ皆非なし
て唯北緯二十七度にある大島を琉球とするより
外なりす又予ハ今まて琉球なりんと思ひし所ハ
九州ハ南の部サツマの国なりと知まり日本人又
云琉球国ハ随分富強の王国にて日本国に属して

其国嗣の代りには江戸に使節を奉す日本にては此島をサツマの侯に属して軍事には彼より軍船を出して侯に従ふ彼又支那帝を其主として朝貢し彼と和平をなす元其国人柔弱にして平和を好み日本人より見れは婦人の如くなりと予此語に就て日本人は如何して琉球を服従せしめたるや日本より琉球まては幾何里数を離れたるやを詳にせす自注予日本の通事に琉球とサツマの距を問ふも一人もこれを知るものなかりし又日本人の作れる地図には何故に琉球をその海濱の近きに記せるやを明にせす欧羅巴人の始て

日本国を地図に載るにはその国にて作る所の図に従ふものなり近新の図には琉球島の代りにヤツノシマ或はタ子カシマを記す此タ子ガシマは薩摩国濱より二十五里若くは三十里許に在てデーメンスタラートの南側をなすものなり

第十一時巳時午にチーメンの口に近つく十五里許にして其處に数多の小島あるを見る其周囲皆陸地に接近すると見へその小島の間を通らんにはかるく爪も宜しからす此に時を費すへく且疑念深き日本人にて俄羅斯人にも他邦の人にもせよ長崎

より外ハ其海濱ニ近つく事を禁すと聞ハ卒尓ニ
船をよらせなハ此度の使節の障ともならんことを恐
れ彼小島を見る事ハ止て第十一時航路を西差南
ニ取てサツマの南東隅ニ向ふニアニヒし岬の北
の西度海灣の南西隅ニ一岬あることを見る 保梅大隅国内浦大
嵜と号本国航海の先達の名を取て此をノガーフ
岬と名く其緯三十一度十五分十五秒其徑二百二
十八度四十九分とす又北の西二十六度ニ當て高
山あり号日本海濱にて見る中の最高とすその側
ニも之れより低き山二嶺あり北緯三十一度四十

一分西徑二百二十八度四十八分とす此山をハ号
ク友星学士の名を取てスキユヘルトと名く 保梅日向
手岬ならん

此海灣の原名ハ我等ニ知れさりしノガーフ岬 大嵜と其
北東ニ向へる岬 保梅長田嵜ならん との間廣十里長十五里
ニ下らすと見ゆ海水の色ハ常なりと見ゆれとも
深ハ百二十尋ありて底ニ到らす

サツマの南東ニ航して其南西ニ當て島を見るアロ
ウスミトの図すらチーメレスタラートの南側と
すなタナツシマなるへし長崎にて其島の原名を

ヤクノシマト言評曰タルヒンスラルシ此航海後ニ図ヲ著シタ子カシマの南西ニ
ヤクノシマヲ記す彼カ日本地図数本此島より杖
ヲ検シて其名あるヲ以て証とすし.
木ヲ出す由へ長崎入常ニ此ニ往来するとあり長
崎ニて予船ニ其材木ヲ送ろ者あり楠樹の外ハ皆其
島の産なりと云我等ハ初て此島ヲ見し時ハヒシ
ラシト欧羅巴洲の内名海湾のラヘンサール島の如く其
樹杪ヲ水上ニ見たりギーメシスタラートヲ高く
余り過ろ時此島ヲ見越しなるニ平にして樹林満
て好景なり北より南ニ延長十八里許廣さその三
分一許なりんその東西の岸ニ各小湾あり此ニ由

てその島二ツニ分ろゝをし其北隅緯度三十度四
十二分三十秒径度二百二十九度零分なり南隅
ハ其緯三十度二十四~~分~~零分なり
脇手ニサツマの南東隅保梅大隅国観音崎なりんヲ船の西二十
里許ニ見て急ニ之ヲ測るニ緯三十一度四分四十秒
径二百二十八度四十分ヲ得ろ午後ヤコノシマの後
より遥ニ南西ニ當て峻山ある地ヲ見ろ其周りヤコ
ノシマより大なり此島ハコルネットのコサシマと
キカイシマの間ニ航する時ニ見しと云自注ユサシマトキカイ
シマハコルネットの海図ニビンナクレ
島と名くアツロウスミトの図ニ記す日本人云ヤ

コノシマの南西に在多山の島ハタ子ガシマなり
と予ヵ日本地図にも其名を記せり其の島の中央を
測て緯三十度二十三分経二百二十九度三十分と
す
第二時時ホに海を測るに七十五尋にして底ハ灰色砂
と黒帯黄の斑ある鉄色の貝殻あり風漸く徐に潮
の暫りをなり浮石雑草折枝裂板等の船に流せ寄
しをかき遣りけれハ文ハ北の方陸に向て浮ひゆ
きたり第四時に風ハいよいよ弱くなり船を舵より
南西の濱に向て進むに高き小島に山嶺重なるを見
る此ハホルカノ島なりんと察せり檣上より望め
ハサツマの南隅に當て小島多く見ゆ此夜天晴風
徐なれハ船ハ小島の方によせず只本路に向て進
ミぬ夜中サツマにもヤコノシマにも所々火の燃
るを見られとも夜中來進ミして別に危ふき事も
なかりし半時毎に鉛を下て海の深を測るに大抵
五十尋より六十尋の深にして海底ハ前に入口に
見しと同し陸地に火を燃す事あるハ合図の火と
見へたり彼土人等欧羅巴の大船を見て恐るゝ国
風なれハあやしミ恐れてかくせしと知りえる暁

に及て一の小島セリホスト名くるを見る經り一里計なり其西二十四里にホルカノ島又其東差延く一島あり其高相似たりアホロスト名く又ホルカノハ南十五里にて周り六里許の一島シユリーと名くるあり又其西よ予か蔵する所の図もシント、カライレと名くる島あり他の図よハ日本の南東濵此名の島を記す予此デーメンスタラート中の諸島の名を詳よ別つ支を要とし長崎にて之を捜索せしか不幸にして日本人の諸島よ名くる原名を聞得ざりしなり此下に記するハ右五島の經緯にして星学士の測量と其地の隅角をセキスタントにて測る所なり

ホルカノ	經二百二十九度四十三分二十秒 緯三十度四十三分
セリホス	經二百二十九度一十五分三十秒 緯三十度四十三分三十秒
アボロス	經二百二十九度三十六分 緯三十度四十三分四十五秒
ジユリイ	經二百二十九度四十六分三十秒 緯三十度二十七分
シント、カライレ	經二百二十九度五分四十五秒 緯三十度四十五分十五秒

朝第七時半卯時よサツマの南保梅大隅国佐田岬なりんを船の北よ見る其岬緯三十度五十六分四十五秒經二百二十九度二十三分三十秒とす岬ハ山嶺鋭圓なる礁

なして南に延てその所に又頂円きを頂尖まる二礁あり予此岬をナツアゴツフと名く是我国の海軍総督として北極規下に航し亜際亜の軍艦に勝たる人にて我国史に著し

サツマの南隅ナツアコツフ此を過て一ツの円錐形は高峯海濱に臨むあり予此船の星学士の名を以てホルネル峯と名く保按薩摩国開聞嶽なるへし其緯三十一度九分三十秒径二百二十九度三十二分なり是ホルネル子ルの測る所にして彼の精巧を用たるなり此山とホルカノ島とを以てチーメレスクワートの南標となす其北東に大湾を開き北に入て深く通する所ありと見ゆれとも亦その奥あるへし此湾ナツアゴツフ岬を其南東としホルネル峯を其北西隅として西くりてたゝ好景色なりその北西岸に各様の礁ありその中にしその如き形の礁両基ありて尤著し只北を除くの外皆高山の囲ミ山上は緑樹茂林に掩へりホルネル峯は此地の舌の如く海より生たるまく此湾の西図に入の標たり

予針路を北西差西に取て彼舌端を越てホルネル峯は北側に出るに西湾といふ小府ありて好平地と見

八田野園林を繞らす濱を離るゝ事僅かにして尖礁
ありて其灣口をなし数艘の舟之に泊せり峡地の後
深く陸地を望むに平に臥したる山の中央より高く
聳へたるに一峯を見る此日午正の測に緯三十一度
九分十七秒にす我等ハ推算と適合せり此に由て
考るに潮の流ハ幾許強くとも干満にハ定格ある
もへ爪強からされハ船の行程の夜にハ拘らす
と見ゆ予測験に従ふにギーメンスタラートにて
新月と満月の時第九時（辰時半 戌時半）を満とし満ハ西南
より起り干ハ北東より始まる 夕の第七時（酉時半）に

ハ海の静なると爪の甚さハ徐なるとを以て彼岬を廻
てサツマ海濱の北西嚮を見るまてに九時を過せ
しなり

サツマの東南辺に航し東南濱の巌礁を見るに大抵
北東差北より若くハ南西差南に向へり保梅（日向の東岸と）
指夫より西に向て一灣をなす其の濱皆崎嶇た
る巌礁にて其辺にハ碇すへき所あるなしと然も
その其地山からなれとも更に高峻著しきを見す
之に反して南東隅よりチツアゴツフ岬に至ては
其海濱の景色美麗にして其地平ハ濱に向ひ数所

の江港ありその土肥沃りして土人繁昌なりと見へ
なり其濱ニて夜中火を焼こと多く彼此ニ舟の往来
するを見ても其繁昌を證すへし○カーツ岬より
チツアゴツフ岬ニ至る東隅より南隅まての間三
十四里ありチツアゴツフ岬よりホルチル峯の方
位ハ北西差北嚮なりホルチル峯より南西の一山
ニ至るまてハ殆んと東西なり此ニ前ニ云海湾あ
りてサツマの北部ハ最好地にして其所ハ船を延
くませて其景色を眺望せしめ船の轉るに従ひ
景色替り実ニ画図を観するニ異ならす其地山を

以て壁牆とし或ハ剎柱のことし或ハ円錐のことくなる
巖ありホルチル峯其北差西の第二峯及ひ深く
陸地ニ在第三峯のことき是なり此地の好景感する
ニ堪たり造物者此ハ如く爰ニ壮観を施せしニ日本
人の夫ニ應して力を致さゝるこそ恨なれ若此ニ
適宜なる構築樹植を置て天然の景色ニ添なハ如
何ならん但峡地の耕墾ニハ土人の力を尽せる莫
欧邏巴人も常ニ務とする所なれハ驚ニ足されとも
山頂のことならす崖上まても透間なく樹植を以て
掩ひたるハ奇ともいへしさて濱より山へも峡へも

皆喬木の並木を植へ連ら御ざるハ殊にめづらし
ハ必其間所々に遊行の為に休息の亭舎あるへし此
の如き並木の道ハ日本の内にも所々ありと見へて
長崎に近きにてアコシマなと之を見たり

南西隅より北西差北の濱を過てその處に大岬あり
保按野間崎なり是子ツマの西端なり此岬をツユスマ岬
と名く俄羅斯の名将都児格の軍艦を砕たる者の
名に取此岬（得ノ字ヲ脱スル乎）三十一度二十四分径二百二十九度五
十八分なり其岬に至るまでに数多の礁の海上に
舌の如くさし出たるありて其間毎に小さき入江を

なす此を通航せしハ夜なれハ其岬の地方を詳に
観る能ハす然とも翌朝も尚之を見しかハ其位置
を知得たり此岬より濱に従ひ東に回り北に向ふ
大湾をなせり此湾の西背ハ我前日見たる所の東
側なり吾長崎に逗留の内ハサツマハ九州の内な
るや彼西湾にて九州と相接するやを疑しか我等
彼両湾の奥を極めされとも其地ハ陸を以て相連
なるへきを知たりさてサツマの長さハサツマ岬
よりツユスマ岬野間崎まで東西六十里廣さ十ツア
ゴツフ岬より其地の北端まで三十六里ありとし

アツロウストトの地図とリウキウとして記す。
所は廣さと適に相符す
第十月五日の夕サツマの南西濱に沿て航せしに島
なりんと見ゆる地を見出しあり後に見れハ此ハ
ミアコシマ　保梅此名西海に見へす位置を按すれハ
ハ甑島に當り下條の形勢を見れハ
此甑島の外にてありし其夜ゆしくその島に向く
にハあらす
船をよせ翌朝ミアコシマの南西端を船より六里
許を隔て見たりツユスマ岬ハ東差南東十八里に
見ゆ此に又小島二ツあり其一ハ平ハ尖崖を以て島
をなせり其一ハ形円く周り三里許共に崖石多し

平此をセームブガテンと名く北東と南西と對峙
して其間六里を隔つ其北東なるハ緯三十一度三
十分径二百三十度十八分二十秒ミヤコシマの南
西隅より六里を隔て方位南より東二十度にあり
保梅鷹島なりん　其南西なるハ緯三十一度二十六分径二
百三十度二十二分三十秒とす　景保按宇治瀬なりん　又北東
に當て岬あり是サツマの西側ハ大灣平りサツマ
灣と名くるものを此岬とツユスマ岬とにて抱へ
て灣をなせるなり此両岬の間北と南の距十八里あ
り此灣の内に小き江港数處ありと見ゆ日本人ハ

話にハサツマ国中の最好港ハ即サツマ侯の居所なりと予その港の名を問へとも告ざりしゆ察するにカコシマなるへし 其地ハ千五百四十二年天文十一年波尔杜尾尔人「アントン、スタ」「フランシ」スコ、セイモタ」アントン、ベツ汁の三人サツマに漂着し人千五百五十年天文十九年フランシコイス゜サヒールグサツマより平戸に至りし記に見へたり

サツマ湾を帯る地ハ甚さ山多く殊に其北方ハ地高く嶺並び波のうねりはてく又その上に高峯の秀たるあり是予前日望見たるものなり 又北西に平かなる山に境する重嶺ありて常にその峯より烟のたちはなるを見る予日本誌に因て之を考るに此山ハエニカと名くるその某なるへし 日本にて耶蘇徒を追捕せし時耶蘇教に入りてその国ハ佛法に改ざる者を此山の火神に供へ罰とすと云へるなりん此山ハ緯三十一度四十三分経二百二十九度四十六分とす 保按此位置に焼山あるをなし恐くハ櫻島の岳ならん此岳高して甑島よりも見ゆれハ西へ延く見しそのなりん又エニがと名くるものハ硫黄が島なるへし位置大に殊なれ共混同せるならん サツマ湾の北隅の岬をカギユル岬と名く是ハ本国の都児格の兵に勝たる軍将の名

を取北岬ハ緯三十一度四十二分二十秒経二百二十九度五十三分とすカギユル岬とミアコシマの東北辺の間に海峡あり廣十里計ありと見ゆ予此間に航らんと欲して船を向てミアコシマの東北の隅に近つきし時カギユル岬始ハ全く北向なりと見へしかハ今ハ多く西に向て差出ミアコシマの北東隅にハ多くの小礁ありて東北より西南に向て差出られを望む鏈を引かるごとし其礁の内色白く塔のごとく其頂に樹二本立るあり此体にてハ此海峡を通航することを容易なる可し且東北の爪吹

あれハ海峡を詳に見ることを能ハず朝午となり爪止んるか第二時半時に於て来り此地方を詳に探ることを能ハず止ことを得ず翌朝を俟終に針路を決して南に向ミアコシマハ(西南隅を廻りミアコシマ)東北隅三里許にて海を測るに深四十尋ありて底ハケイ石沙及ひ珊瑚瀬なりき船其濱崖に沿て近く通行しミアコシマの東北辺ハ委しく見たり

ミアコシマハ諸地図に図することを詳ならず其位置も明ならず或ハ此島を全く載せず又ハ日本濱より七十五里の距に小島とし記すもあり我等今此島

を見るに諸小島の集り成すものにて各相距を延く其間に溝渠を隔て或ハ小舟の為にハ好港とすへきもありて其島々の間彼此に宗廻るへく見ゆ總て礁を以て島となせるものなれとも日本人の業を勤るも見へ緑園樹林も其上に見へてサツマの地方に見し如く又長き並木道の山に通するあるを見る礁巖を除て島の長東北より南西に向ひ十八里其廣ハ四里に過す其西南の部にて全島の半なるなり其西南隅偉三十一度三十五分三十秒徑二百三十度二十分なり其東北隅偉三十一度四十九分徑二百三十度の九分其中央偉三十一度四十三分なりアロウスミト名人の此島ハ図ハ其四方一の小なし此を濱より七十五里に處す他図にハ只五里を距る處に置けり是ハ其礁巖をも共に此島に算入するなるへし阿蘭陀人ハ歳々此にアコシマの辺を通航すれハ必其地図にハ委しかるへけれとも刊行し世に出さす欧羅巴の地理家日本長崎辺の海濱の位置を詳に知さるなるハ実に彼国人の頼に寡きに因へなり

此日ハ日本ハ小舟多く我船の前後に就きたりあり

しハ彼と言を通すへき事なく近くいたらす却て
我船ハ近つくをハ慎て避ぬ我等船中の日本人を
して彼を呼しめられとも彼等答へす是彼国にて
異国人と交を禁するゆへ敢て答をなさゝるを見
る我等強く彼か答を求めて事を記すを好まされ
とも又彼等か同国の人に呼はしむ忌んて言を交
へすこと寸白となるハ驚きたり
暁に向て黒色にして尖りたる礁の突起せるを見る
其緯三十一度四十二分二十秒其経二百三十度二
十六分三十秒にてアコシマの西南隅より七里を隔

て方位北の西三十九度にありて此をロツセレ、デ
ル、ナデスタと名く翌日の暁に北に当て島を見我
等此ハ五島なるを知たり猶其西に礁あまたある島
二あり其一ハ平なり其一ハ南に張るを一里にし
て頗る高く二尖あり礁周り二里許あり此諸島ハ
アロウスミトの図にアツセス、エ、アルスと名くる
ものなるへし此ハ緯三十二度二分三十秒径二百
三十一度二十三分三十秒五島岬より三十三里を
隔て南の西九度にありてアコシマの南西隅より
五十八里を隔て北ハ西六十五度なり此日羅盤の

針の五五分の北西差あり

晌午に船の在處を測るに緯三十二度二十二分三秒五島岬を狀より北の西三十九度に見其諸島の相連れ北端を北の東十四度に見る午後第四時脚船の陸に近づくこと三里爪は徐に潮は東北に流るること強く船を漂せて五島を詳に見ることを得す（自注 次年長崎を出る時は爪あしくふらく又之を見ること能はす）霧五島岬は其島の西南端にして又日本海濱諸島の西南尽頭なり故に狀等のむ詳に測るべき所なり其岬の緯三十二度三十四分五十秒徑二百三十一度十六分此は諸島は

山多きもの相連りて一大島をなして西差南西より東差北東に向て延なり其前に数多の小島ありて尽く緑(アヲ)島ならざるはなし總て何れの島信に小なれども皆美好の緑色を見るその諸小島は互に離れて相連なり其中の最大なる者は三ッに分ちたり是故に又三離名を命す（自注 日本地図に此諸小島相連なり延く壹岐の島に至る其小島中の最大なるを西南盡以とす）

夕に當て東北は徐爪に船の帆を張りつゝして東差南東に向て來りしか夜に入て爪替りて東北に向ひ暁に至て九州の一部彼長崎の在處に正しく望

なり其地甚しく山嶺多く南に二ツの高岬を見る其
南端なるは緯三十二度三十秒径二百三十度十一
分其北端なるは西に向てさし出る最高の重嶺な
り其緯三十二度三十五分一十秒径二百三十度十
七分三十秒とす此は所謂野母岬にして舊図に長
崎の地の南端に記す是なり野母岬とせらロテ岬
詳示とは長崎大湾の西端にして予此海湾を此全島
の名に従て九州湾と呼へり此湾内島多く礁多く
野母岬の濱より港口までは充船の難路なり我等考
に尋常其港を三十二度三十二分とせり如く南に

よりて其筋を航せは彼礁を離る事甚た遠かるへ
し夫より北なる濱に沿へしとす此湾の北隅に小
島は並ふあり察するに五島の諸島に屬するその
あらんその諸島相連りて東北に延たり野母岬に
り長崎港口に至る礁巖の後に数多の小湾ありて
地方の平地に通すその峡谷青時緑樹にして美観
なり平地の後北に向て皆一連の嶺なり正午に船
は三十二度三十六分四十秒の緯にして長崎の南
に在しに日本役人小舟にて来て数言を述へ夫に
答をなさせしに直に引返し又二時一時を過て別人来

り居たり夕の第五時（申時半）半にして長崎港口より碇
泊す其所ハ深三十尋底ハ細なる灰色の沙あり船
の南ハ西十三度より伊王島の西北隅を見高鉾を南
の東七十四度福田岬を北の東五十五度より見船よ
り近き陸ハ半里を離るゝのみ

高叢藏